



土岐市教育研究所	0572-54-1111 (内374)
TEL FAX	0572-55-6310
メールアドレス	kyoiku@city.toki.lg.jp
所報	No. 575
発行責任者	所長 西尾 実
発行日	令和6年 5月 17日
題字	長谷川 広和 教育長



撮影 泉小学校附属幼稚園
大東 美月 先生

『背よりも高く
積み木を積んだよ!』

「人とのつながりを生み出すコミュニティスクール」

大谷翔平選手のホームランを見て、一人でも野球をやりたいと思ってくれる子どもがいてほしい。毎日、ニュースで大谷選手の姿が取り上げられない日はありません。大谷選手の話は、夢が広がります。一方で、今、話題になっている部活動地域移行の要因の一つでもある少子化は、部活動以前に、学校単位でチームが組めず、子どもがやりたいスポーツを地域で手軽にできない状況が各地で頻出しています。

先日、中学生の東濃地区軟式野球選手権大会が行われました。東濃5市で12チームが集まりました。東濃地区の中学校は現在37校で、20年前は40校ありました。20年前の平成16年当時、中体連の東濃大会は37校の学校に軟式野球部はあり、最後の夏の中体連の頃の私は、授業そっちのけで野球の事しか考えていない野球部顧問でした。あれから20年。とうとう土岐市からこの大会に出場する中学生の野球チームがなくなってしまいました。今回、この大会に出場したチームに、4月に入学したばかりの1年生を中心としたチームがありました。学校部活をベースにしたチームではなく、それぞれ生徒が所属する学校は、さまざまです。そのチームが、3年生中心のチームと戦いました。公式戦は初めてとも思えるチームでした。残念ながらコールド負けしてしまいましたが、3年生相手に必死でアウト一つ一つを積み重ね、嬉しそうにベンチに戻ってくる子どもの表情は明るく楽しそうでした。仲間のエラーを責めたり、ベンチから厳しい指導者の言葉がかけられたりすることなく、子どもの精一杯のプレーを温かく見守るスタンドの保護者の応援が、とても爽やかでした。子どものスポーツを通して、つながる保護者同士

土岐市教育研究所長 西尾 実

のコミュニティ。指導者として、子どものスポーツの場を作り、子どもの居場所を支える地域の大人。こういう人と人とのつながりを失いたくないと感じた休日の一コマでした。

令和2年度から土岐市の小・中学校は、全ての学校がコミュニティスクールになりました。市町村立学校は、地域との結びつきが強いものですが、敢えてコミュニティスクールと命名するのは、時代とともに、地域と学校に距離や壁ができてきたからでしょうか。最寄りの地域や学校単位で、子どもがやりたいスポーツを手軽にできない時代になってきた今、未来社会の創り手である子どもたちのために、地域との垣根のない学校でありたいと思います。子どもが少ないからこそ、見守る大人や先生の支えが必要です。子どもが少ないからこそ、地域と学校の大人同士が、顔が見えるつながりをもつことが大切です。PTA行事に保護者の参加が少ないから、地元のシニア世代に手伝ってもらおう。平日の授業参観に忙しい保護者の参加が少ないから、三世帯参観にして、シニア世代にも見てもらおう。保護者以外の地域の方に、子どもの活動に参画する機会を作り、多くの目で子どもを見守っていくのが、コミュニティスクールです。

コミュニティとは、つながりを感じられ、安心できる場所。地域にある小・中学校は、人がつながるステーション的な場所でありたいです。土岐市のコミュニティスクールは、大人同士がつながりを作り、子どもが安心して過ごすことができる居場所を増やしていきたいです。時代に合った知恵を出し合いながら、地域とともにある学校づくりを進めていきましょう。



学校・教師 - ひたすら子供の幸せを願う -

土岐市教育委員会
教育長 長谷川広和

「学校」の存在意義

新型コロナウイルス感染症が5類に移行して、初めての春を迎えました。運動場いっぱいに広がり、歓声をあげながら遊ぶ子供たちの姿を見ると、学校の日常が戻ってきたことを実感します。ここ数年、学校という自己表現できる場で、いくつもの制約を子供たちに強いてきたことを心苦しく思います。学校は、子供たちの息吹や活動があって初めて成り立つものだと思改めて感じています。

4月8日、私は濃南小・中学校の入学式に参加させていただきました。小学校1年生と中学校1年生が一緒に行く入学式を初めて経験しました。新入生入場では、不安を感じながらも、新しい学校で頑張ろうとしている小学校1年生を中学校3年生のお兄さん、お姉さんが手をつないで入場し、しばらくの間、立ち膝をついて目線を合わせ、微笑みながら声をかけて支えていました。その横には、中学1年生が、緊張した面持ちで、姿勢よく座席に座り、中学生になる決意を姿で示していました。私は、このひとつの空間のなかに、小学校1年生から中学校3年生までの成長の段階がみられて、「学校」とはなんて素晴らしいところだろうと思いました。子供たちと先生方の一日一日の教育活動の積み重ねにより、こうして子供が段階的に育っていくのかと思うと「学校」の存在意義と教育の重みを改めて認識することができました。

「教師」は魅力ある職業のはず・・

株式会社クラレが、この春に小学校に入学した子供と親を対象に、将来就きたい職業・就かせたい職業の調査を行ったところ、男の子の1位はスポーツ選手、女の子の1位はケーキ屋・パン屋。男の子の親の1位は公務員、女の子の親の1位は看護師。ちなみに、教師は女の子の9位で、男の子は選外でした。教師はそんなに魅力のない職業なののでしょうか。私は、中学校の時の担任の先生との出会いが教師という道、生き方へと導いてくれました。きっと、先生方もそんな出会いや経験をしてみえたのではないのでしょうか。今度は、私たちが、日々の学校生活の中で、教師という職業の魅力と重みを姿で伝えていかなければいけないと思います。

「教師」が楽しいと感じてこそ

令和3年1月、中教審の「令和の日本型学校教育の構築を目指して」において、【ウェルビーイング】という言葉が示されました。生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力。つまり、【ウェルビーイング】とは、人々が心身共に幸せな状態を指し、教育は人を幸せにするためのものと目標を明確にしています。学校は、子供たちが自分の可能性を広げ、自分の未来を拓く場であり、子供の願いを受け止めて、ひたすら子供の幸せを願う場と言えます。

では、「子供たちは、学校へ来ることに幸せを感じているのでしょうか?」「子供たちが幸せと感じるのはどんな時でしょう?」「先生方も学校に勤めることに幸せを感じているのでしょうか?」楽しさが、幸せに直結する要素だとすると、「子供も先生も、学校を楽しんでいるのでしょうか?」私は、学校で学ぶ楽しさを4つに整理しています。①十分に活動する楽しさ②できる楽しさ③わかる楽しさ④仲間と集う楽しさ。この4つの楽しさを、教師自身が実感したうえで、授業などを通して子供たちと共有する。この教師自身の楽しさを追究する姿勢こそ、【ウェルビーイング】・幸せの実現のために、大切にせねばならないことではないでしょうか。

子供に注がれる「温かなまなざし」

入学式に参加させていただいて、もうひとつ感じたことがあります。先生方の子供たちに注がれる「温かなまなざし」です。先生方が子供たちをよく観て、見届けていただいていることがその視線や動きから感じられました。

私は、幸せを感じる要因のひとつに、自分自身の自己存在感や自己有用感。誰かから求められたり、認められたり、逆に支えられたりしているという安心感があると思います。学校に自分の居場所があるということが、どれだけ子供たちを前向きにし、希望をもたせ、充実感につながっているか。その根底には、子供たちを受け止め、受容する先生方の「温かなまなざし」があると思っています。そんな先生方の子供たちへの愛情が、学校を支えていることを確認し合い、大切にしていきたいと思っています。

1 はじめに

ドラマ「舟を編む〜私、辞書つくります〜」、原作とはまた違う魅力に引き込まれ、静かに満たされるような気持ちで見えていました。見た方もみえると思います。作中の、辞書の装丁を担当する人物が、「言葉の大海原を渡る舟」をイメージして夜明けの海を描き、のぼる朝日を「はじまりの光」と表現しました。辞書は、言葉と出会う「入口」だから、だそうです。

学校も、子供たちや先生方の「はじまりの光」の中でスタートしました。朝日のようにはのぼっていかないことが多いと思いますが、新たな出会いと子供の願いを大切に、私たちも頑張っていきたいと思います。



2 変化の中を

コロナ禍の間にも変化は急速に進みました。ICTの活用は、既に教師も子供たちも日常化し、教育現場での対話的AIの効果的な活用まで言及されています。「全ての子供たちの可能性を引き出す『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現」は、私たちに授業観の変換を求めています。また、不適切指導の認識、不登校対策にみる学校の新たな機能や役割、さらに、特別支援教育、不祥事根絶、PTA、少子化による学校の統合問題など、私たちは日々学んで知識や認識をアップデートしていかなければなりません。「具体的にどのように？」と最適解を求める中で、最近思うのは「不易」なものの強さです。それは、単に前例踏襲の産物ではない、時代を経ても確かな理念のもとに受け継がれ、残されているものです。山田前教育長が、常々「変えてはいけないこと、変えなければいけないことを見極めるように」とおっしゃっていたことを改めて受け止めています。

実際は、立ち止まっているわけにはいきません。やってみて気付かされることがあります。ねらいや効果を問い直し、変化を起こす勇氣、変えたことの中に「不易」なものがあつたなら、立ち戻る勇氣、どちらも必要です。そこからどのように創り直していくかが、学校の挑戦だと思っています。

3 土岐市校長会として

土岐市が抱える教育課題は、日本の教育課題と重なり、県や市の様々な方針や対策を受けて、各校でも取り組んでいるところです。校長会として、現任校の課題解決だけでなく、土岐市の教育課題を教育委員会と共有し、共に考えていかなければなりません。校長会の取組を一部紹介します。

(1) 三部会(研修部会)…学校マネジメント

①学校経営部会

関係機関や企業等、様々な分野の方の話を聞き、学校経営に生かす理念、視点、実践を学び、課題の解決に向けた連携を図ります。

②課題検討部会

「児童生徒数減少に伴う土岐市の学校の在り方」「『土岐市教育支援センター』の効果的な活用」「いじめ問題対応等の危機管理体制」「不登校児童生徒の校内支援体制」「教員不足」等の喫緊の課題について、研修や意見交流をし、要望も踏まえ検討します。

③人材育成部会

教職員が、モチベーションを高くもち、経験や能力に応じてキャリアアップを図り、やりがいをもって貢献できるよう、OJTによる若手やミドルリーダー、管理職の育成について研修します。

(2) 教育委員会、関係機関との連携

- ・教育委員会と校長会役員との定期懇談会
- ・土岐市の教育課題の解決に向けた中長期的な改革・改善についての意見交流
- ・子供の育成に係る各種団体の活動への協力

(3) 学校交流・小中別交流

- ・組織や教育課程、行事、その他の懸案事項や実践の交流
- ・生徒指導事案・教育相談事案に対する体制や対応の交流、未然防止体制の交流
- ・市内全校で統一する事柄の検討

14名の校長・副校長は、子供、保護者、地域に信頼される学校、職員がやりがいのもてる学校をつくる、その責任を自覚し、ともに学び、高め合う校長会をめざします。



バランス感覚



駄知中学校長
板倉 義樹

人との絆の中で

学校の中にも、人と人との結びつき、支え合いや助け合いがあり、絆づくり、集団づくりが展開されます。

学級・学年経営は、「楽しみ」であり「楽しさ」があることの一つでした。もちろん、大変な学級・学年を受け持つこともありましたが、目指す姿のために、何にこだわり、何を語り、何を子どもに任せ、どんな姿を認めるのか。基本にあるのは「あたたかい雰囲気」です。少しずつ雰囲気が醸成されていくことにやりがいがありました。無意識に行っていることかもしれませんが、いわゆる「強制」や「許容」のどちらか一方ではなく、「厳しいけど、楽しい・やさしい・おもしろい」など、相反することのバランス感覚が重要だと思います。

集団の中には事情を抱えている子もいます。その日の様子や状況によって、声のかけ方や要求の度合いを調整するバランス感覚も必要です。そのためには、相手や周りのことを考える心も大切です。相手のことに気づかなければ始まりません。かなり前のことになりますが、ある中学校に勤務の際、「No, 1 より Only One」というスローガンが位置づけられていたことがありました。ある校長先生は「そこに”and for you”の気持ちを付け加えてほしい」と全校に対して常々話されていました。「自分だけ」でなく「相手のこと」も考えられることの大切さを伝えているところです。

ふるさとへの愛着と誇りをもち

駄知中の生徒は、それこそ「地域の絆」の中で育っていると実感する日々です。しかし、子どもの数の急激な減少は、駄知にとっても大きな課題です。地域の方々は、地域行事やつながりを大切に、変化させながら盛り上げようとしていらっしゃいます。厄年会の方の中には、現在駄知以外にお住まいの方でも学校の支援をしてくださる方がいらっしゃいます。そんな地域の方々の思いや変化、学校の変化とのバランスも必要です。年度当初の挨拶にいらっしゃった青少年育成会長さんが、「良い思い出を作って、駄知を離れない、離れた

としても戻ってきてもくれるようにしたい。」と話されました。今年度も中学生ボランティアや職場体験など、地域の絆の中で学ばせていただき、自分なりに考える機会を大切にしたいと思います。

夢を実現できる人を育てる

少し古いですが、『平成22年版家庭教育手帳（文部科学省）』の「個性と夢」という章の最初に、『人は夢を育て、夢は人を育てる』とあります。次の頁には「どんなに小さく、どんなにへんに思えるものでも、子どもの夢や希望に耳を傾け励ます」とあります。また、別の頁には「自分で考え自分で行動できる人に育ってほしいなら」という見出しで「過保護や過干渉はやめる」とあります。「夢の実現のために何が必要か」については、多くの方が自分の考えを本やブログ等で述べられています。あくまでもそれぞれの方の考えではありますが、おおよその共通点は、

- ①自分の理想や夢を思い描く
- ②自分や能力など現実を直視する
- ③この両方を考えるバランス感覚

です。①夢を思い描くためには、自分の視野を広げることと同時に、家庭教育手帳にあるように周りの関わり方も大切です。②現実を直視することは、“夢をあきらめる”ことではなく、“夢の実現に必要な力を見極めるために自分の力を知る”ということです。③真剣に取り組むからこそ偏ることがあるため、傾聴や自己受容が必要だという人もいます。夢に向かって進むこと、自分を見つめることのバランスが大切なかもしれません。

「人との絆の中で、ふるさとへの愛着と誇りを持ち、夢を実現できる人を育てる土岐の教育（夢・絆プラン）」ですが、夢や目標を見つけるために、その実現に近づくために、まずは自分自身を見つめ、考えを広げることが大切だと思います。そして、駄知中教育目標「鍛えよう 頭・体・心」をもとに、仲間や地域と過ごす中で、生徒も職員も、バランス感覚を養いながら、自分に必要な力を鍛え、高めていくことを目指したいと思います。

浅野教室から

土岐市教育相談・適応指導教室

浅野教室 小木曾寛美

浅野教室の役割を一言で言うなら「居場所」に他なりません。自分の家や学校以外の居場所です。それは、建物や場所を提供するという意味もありますが、大事なのは「自分が自分で居られる場所」ということです。そして、「次に進むエネルギーを貯め準備をする場所」でなくてはならないと思っています。そのために、子ども理解に努め、支援の方法を模索するわけですが、その中で昨年度行った支援を2つ紹介します。

① 校外学習『そうだ、岩村へ行こう』

昨年の秋、子どもたちと計画を立てて、岩村までJRや明智鉄道を乗り継いで行って来ました。



事前に、電車の時刻やお金を調べ分担してしおりを作りました。服装、持ち物なども考えた

り相談したりしました。とは言っても、当日になるまで、本当に子どもたちが参加できるのか不安でもありましたが、予定していた子たちはみんな来て、秋、いつもとは違う一日を楽しみました。そして、帰ってきた後は、一人1枚、まとめの掲示を作ってみんなで共有することができました。

この活動（支援）の目的は、まず、どうしても誰かに何かしてもらおう側になってしまう子たちが、自分たちで活動を進めていくこと。それによって、自信や子どもたち同士の認め合いなどが生まれてきました。もう一つは、大きな自己決定の場であること。参加するのかもしれないのか、学校の行事なら大きな葛藤を抱える子たちです。でも自分で決めて参加する、楽しく過ごせるかどうかは自己責任だということを経験で学べたのではないかと思います。

② 個別支援

浅野教室は、校種も学校も学年も違う子どもたちが通って来て一緒に生活しています。中には、それがいい子もありますが、それが苦手で浅野教室に通えなくなる子もいました。



そこで、通所する曜日や時間を固定し、支援者も固定しながら浅野教室に慣れていくという個別支援を提案したところ、通所が続くようになったのです。本人が希望しなければ、他の通所生と一緒に活動することもしません。この支援は、まず、家から出て浅野教室に来れば花マルと言うことです。それでも、狭い浅野教室ですから、周りの動きは十分伝わります。そこから全体の活動に参加できる子もでてきました。自分の居やすい距離感を作っていくように支援を進めていきます。

こうした支援は、日常的に行っている支援がベースになっています。それは個々の子どものしんどさを共感的に受け止めること、少しでも学習に向かえるようにすること、保護者の話を聞きながら保護者を含めた支援をしていくこと、学校の先生方と情報や目標を共有することなどです。そんな中で、「今、浅野教室に通ってきている子」たちのニーズに合わせ、その時その時の支援を工夫していくことを大事にしていきたいと思っています。

学校の先生方も、是非、浅野教室をのぞいてくだされば有り難いです。

令和6年度 土岐市小中学校教育研究会 各部のテーマ

部 会		部会のテーマ
小 学 校 教 育 研	国語	一人一人の言語能力をのばす国語科授業の在り方
	社会	よりよい社会の実現をめざす子が育つ社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業を通して～
	算数	見方・考え方を働かせ、数学的に考える児童を育てる指導の在り方
	理科	自ら問題を科学的に解決することができる子の育成を目指した理科学習
	音楽	楽しさと確かさのなかに、美しさを求める音楽科教育
	図工	図工・美術で「つなげる」生活・社会・未来 ～子どもたちも先生も「つくって楽しい授業」を目指して～
	家庭	自ら学び考え実践し生活をよりよくしようと工夫する子の育成
	体育	仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育学習の創造
	英語	外国語を通してコミュニケーション能力の素地・基礎を養う指導の在り方
中 学 校 教 育 研	国語	生きてはたらく言語能力の育成
	社会	主体的に社会の形成に参画する力を育て、「できた」「わかった」と実感できる授業の実現
	数学	「できた」「わかった」を実感させる数学教育の創造
	理科	「理科の勉強が好き・楽しい」と実感できる理科指導 ～“科学的な探究の過程”と“つなぐ指導”を通して～
	音楽	楽しさと確かさのなかに美しさを求める音楽科教育 ～全ての子供たちの可能性を引き出す音楽科の授業～
	美術	図工・美術で「つなげる」生活・社会・未来 ～子どもたちも先生も「つくって楽しい授業」を目指して～
	保健	生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む資質や能力を育てる体育授業 ～主体的・対話的で深い学びを通して～
	技家	未来を切り拓く確かな実践力の育成 ～見方・考え方を働かせた、課題解決を図る指導を通して～
	英語	「できた・わかった」を実感しながら、コミュニケーションに挑み続ける生徒を育てる指導を求めて
特 別 支 援	小	豊かな生活をめざし、生きる力を共に高め合う子どもたち ～一貫性・柔軟性のある、支援体制・支援方法の一層の充実に焦点を当てて～
	中	豊かな生活を目指し、生きる力を共に高め合う子どもたち ～一貫性・柔軟性のある、支援体制・支援方法の一層の充実に焦点を当てて～
	通級	一人一人の特性をふまえた 通級での指導のあり方
各 種 研	養教	自分や相手の身体と心、命を大切にできる子の育成 ～命の教育を通じて～
	事務	子どもたちの豊かな育ちを実現する学校事務 ～研修を通じた知識・経験の共有による、主体的な校務運営参画への推進～
	栄養	児童生徒が生涯にわたり健康な生活を送るための「食に関する指導」の推進を目指して ～実践力を高めるためのつながる食育～

令和6年度 教育研究所の事業紹介

今年度も教育研究所では、教職員と子どもたちが様々な力を高めることができるように、下記のような事業によって、園や学校の教職員と子どもたちを支援します。

1 訪問・派遣事業

土岐市研究推進指定園・学校事業
「市教育の方針と重点」及び園・学校の教育目標の具現を目指した計画的な研究推進を補助すると共に、その研究成果を土岐市内外に広めます。 【園教育研究】 該当園なし 【学校課題解決】 濃南小・中学校〈初年指定〉 泉小学校・泉西小学校・泉中学校〈中間報告〉 土岐津小学校・土岐津中学校〈発表〉 【金銭教育】 下石小学校〈発表〉 【授業改善〔東教推指定〕】 泉中学校〈中間報告〉
幼稚園・こども園・学校訪問
園・学校の教育目標及び「市教育の方針と重点」の具現状況と、教育課程の編成及び実施状況を把握し、今後の園・学校教育の充実に向けた改善策、方向性を確認します。
教職員資質向上サポート事業
経験年数6年目までの教職員が自信をもって職務に向かいながら、授業の指導力を高め、キャリアアップにつながるように支援します。

その他に、ALT派遣事業、「はつらつ人材バンク」派遣事業等があります。

2 研修事業

マイプラン研修
幼稚園・こども園の教職員を対象として、個人または園の研究主題に基づいた主体的な研修を行い、日常の保育実践に生かすことによって教職員の資質向上を図ります。
嘱託研修員会
「市教育の方針と重点」の具現と教職員の指導力向上を図るために、市内小中学校から選ばれた4名の先生を中心として、毎月1回、授業実践や研修会を実施します。実践の成果については、「教育とき」等を通じて市内に発信していきます。
教育実践論文・実践記録
園や学校の教職員が、論文や記録として日々の研究実践をまとめる過程を通して、指導力や論理力を高めます。
オンライン研修
今日的な教育課題や市内で共通理解を図るべき内容について、オンラインのメリットを生かした教職員の研修機会を確保します。

その他に、学力向上推進委員会、サマーセミナー、運動好きな子ども育成、各種主任研修会等があります。

3 児童生徒能力開花応援事業

各種講座
小・中学生を対象として、子どもたちの興味・関心や技能、表現力等を高めることができるように、7～8月に様々な講座を設けます。



「和顔愛語（わがんあいご）」

駄知小学校 教頭 柳原 伸哉

私のこれまでの教員人生で一番印象に残っている言葉は「和顔愛語」です。私が初任者の時のことです。私の未熟さと、当時の泉西小学校は子どもたちが落ち着かないことが多かったことから、目の前のことに精一杯でついつい児童を叱ってしまうことが多くありました。私の表情は、「しかめっ面」か「無表情」で、しかも注意の言葉が多かったように思います。児童間のトラブルが起こるとすぐに指導しなければと意気込んでしまい、先輩の先生に「まず子どもに話を聞いてみたら」と言われて冷静になる始末でした。

異動する直前に、当時の校長先生が「きみは、授業をやっているときに苦しそうな顔をしている。もっと楽しめばいいのだよ。」とお話していただきました。その時に「和顔愛語」と書かれた直筆の色紙をいただき、「なごやかな顔で愛しみの言葉をかけることを心がけて教員

をやりなさい」と笑顔で話されました。その色紙と言葉を大切にしてきました。

その後、初めて小学校1年生の担任をさせていただいた時のことです。子どもたちの顔が固いと感じ、入学して緊張しているのかと考え、いろいろ工夫をしてみましたが無効がありません。何かの拍子に私が笑ったらその瞬間1年生の表情がパーッと笑顔に変わりました。なんのことはない、私の表情が硬かったのが原因でした。教員の影響力の大きさを感じ、自分の振る舞いに気を付けないといけないと改めて思い知りました。教頭をやらせていただく中で、子ども、保護者、職員にはもちろん、学校を支えてくださっている地域の方、業者の方などにも笑顔やお礼と思って勤めています。これからも常に自分の振る舞いを振り返り1日1日を大切にしたいと思います。

掲 示 板

本年度もよろしくお願いします

【教育研究所】

所 長	西尾 実（教育次長）	〈前列中央左〉
主 任	内海 裕樹	〈前列中央右〉
副 主 幹	吉村 康介	〈前列左〉
指導主事	井上 ゆう子	〈前列右〉 虎山 泰昌 〈後列中央〉
〃	古川 直利	〈後列右〉 林 奨司 〈後列中央左〉
〃	大脇 直仁	〈後列左〉
事務職員	大野 昭彦	〈後列中央右〉



【浅野教室】



【ALT】



ウィリアム・スワン



ジャクソン・オースティン

室長	小木曾寛美	〈左から2人目〉
相談員	加藤 千穂	〈右から2人目〉
指導員	佐々木乃里子	〈左〉
	柘植 智暁	〈右〉
	林 宏恵	〈中央〉